

七十年代以降の人麻呂歌集のいわゆる「略体歌」の書記に関する研究は、二つのアプローチに支配されている。第一は歌集以外の万葉集に見えない用字法の追求で、第二は木簡や金石文の書記を含む書記史の中の位置付けである。この二つのアプローチに基づいて進んで来た研究によって、略体歌の書記の特質や意義の多くが明らかにされたものの、一方ではその書記の本質に関する問題がまだ十分に認められていないと考えられる。本稿では、第一のアプローチに属する研究においてよく論じられて来た特別な訓字の一種を指す「非対応訓」という用語を見直したい。「非対応訓」は、1989年に「人麻呂歌集古体歌の非対応訓」について」という論文で、稲岡耕二氏によって提示された用語である(注1)。

人麻呂歌集「略体」書記について

——「非対応訓」論の見直しから

Ⅳ 文字ナキストの、ナキストとしての水準を問い直す 万葉集

れるのではない。そのことによつて物語のふくらみがもた
らされるともいえる。しかし、あわせて整合してはならな
いものなのである。語り直すということもできるが、本質
は、視点を変えたでべきことの構成をもつて、でべきことが複
線化され、あるいは重層化される——念のためにいう、時
間構造の重層ではない——ことにある。青木前掲書は「二
重会話」としてこれを取り上げたが、「二重」になるのは、
会話のなかで複線化するでべきことに会話を含むからに他な
らない。要は、会話だから、でべきことをあらためて別に構
成することができるということである。口承的な「語り
癖」(西郷)などでなく、あくまでナキストにおいて方法
的になされたものとして、それはある。

一般化していえば、会話は、訓で書き、ことがらを表現
するという、ナキスト全体と同じ書記の質を共有すること
である。地の文におけるでべきことの繰起に対して、それと対
応しながら、でべきことを構成し直し、複線化するものとし
て方法化されるにいたるのである。

歌についてはふれる余裕なくおわるが、歌は、一字一音
の仮名で書き、ことがらとは別なものを表現する。しか
し、叙述の複線化として(注6)、会話と、方法的意味は共
通すると見るところで、ナキストの水準がとらえられるべ
きであろう。

しる、「非対応訓」の再考によつて、略体歌書記の研究の
基本的なパラダイムに関する問題を提起して見たい。私の
考えでは、略体歌における書記は本質的なレベルで木簡な
どに見える日常書記と共通しないが、これまでの多くの研
究では、略体歌書記はその実用書記の延長として扱われて
いる。ここでは、略体歌の書記は、七世紀末の木簡などと
の比較に基づいて、いわゆる「非略体歌」そして人麻呂
作歌や万葉集一般の訓主体書記と、発展段階的な関係にお
いて考えられて来た。「非対応訓」という概念はこのパラ
ダイムと綿密な関係をもつので、そこからこの問題提起を
始めたい。

一 いわゆる「非対応訓」の再検討

略体歌の書記の一つの特徴は、字義と言葉との間の関係
が不明であるのに、明らかにそのように訓ませられている

David Lurie
David Lurie

注1 「坂本」からさらに逃げ続けて、黄泉比良坂の坂上で
イザナキはイザナミと向かい立つと取るような説(姜鍾植
「黄泉比良坂」考)「古事記年報」四二(二〇〇〇年)ま
で出たのであえて付言する。
注2 その書記をナキスト全体として成り立たせるため、字
種を絞る、訓・用法を限定する。さらに、意味の切れ続き
(意味単位)把握を確保するのに、多様で多数の注をつけ、
また、接続詞を頻用する。参照、神野志隆光「古事記
の表現 序説」(論集上代文学)一七、笠間書院、一九八
九年。
注3 たとえば、倉野憲司「古事記全註釈」(三)三省堂
一九七六年)は、かわる民族の記述をその勢力の反映と
して、鑛作や玉作の祖まで除外される「日本書紀」本書よ
り「古事記」の伝のほう古いというが、見るべきなの
は、そうした問題ではない。
注4 神野志隆光「古事記 天皇の世界の物語」(NHKラ
ックス、一九九五年)。
注5 参照、吉井巖「天皇の系譜と神話」(一)、塙書房、一
九六七年。
注6 そうした把握の方向性は、身崎寿「モノガタリにとつ
てウタとはなんだったのか」(「日本文学」一九八五年二
月)、品田悦一「歌謡物語―表現の方法と水準」(「國文學
」一九九一年七月)、神野志隆光「古事記の悲恋」(久保朝季
編「悲恋の古典文学」、世界思想社、一九九七年)などに
すでに示されている。

—東京大学教授—

と考えるべき用字である。そのような用字のもっともよく論じられている例は「側隠」の歌である(注2)。「側隠」という熟字は「いたわしく思う・心を痛める・しびがたく思う」意味を持つので、「ネモコロ」という語の意味との間には、かなりのズレがある(注3)。既に指摘されているように、「側隠」の字義と歌全体の意味との間には、ある種の表現効果をもたらす響きがある。つまり、「心を痛める・しびがたく思う」の意味は、ネモコロと直接的な関係はなくても、恋の悩みを嘆く歌にふさわしく、その歌の表現を文字のレベルで深める機能をもつ。ネモコロが「恋」や「片念」に係わる十一・二・三・九・三・二・四・七・二と十二・二・八・三には、その機能は明らかに見えるし、ネモコロが「照る」に係る十一・二・八・五・七にも、乾かない袖に「イモニアハス」の恋の悩みを感じる。十一・二・四・七・三の場合には、別れる時に「君」と歌い手がしがしがたく思っていたことが暗示されていると考えられる。
 心哀(十一・二・四・八・三・一・三・〇)や無芝(十一・二・三・七・三・二・四・一・二・四・四・一)のような例と同様に、「側隠」をネモコロと訓む場合には、字義と言葉との間の回路が直接では無いことは認めなければならない。そこで、稲岡氏は、略体歌にしか見えないこのような訓字を、「非対応訓」という枠組に捉えられる。しかし、このような呼び方は、以上の書記の特質やその表現的な効果を明らかにする一方、いわゆる「非対応訓」と他の略体歌の用字との共通点を見逃

ず危険を伴うと考えられる。「側隠」のような訓には、三つの要素が働いている。即ち、文字の漢語としての意味と、その字の訓である和語の意味と、歌全体の意味との間に、いわゆる「非対応訓」の表現が成り立つ。たとえば、「見渡 三室山 石糠昔 側隠音 片念為」(十一・二・四・七・二)では、ネモコロは「心をこめて」か「ひたすらに」の意味で、カタオモヒに係るが、別なレベルで、「側隠」の字義である「心を痛める・しびがたく思う」の語勢が、カタオモヒと関連させられて、歌い手の悩みの状態を強める。
 このような字義と言葉と歌全体の相互関係は、いわゆる「非対応訓」だけではなく、もっと直接的な回路の訓をもつ略体歌の他の文字表現の種類にも認められる。略体歌の訓仮名にも、「非対応訓」の場合と類似した相互関係が見えるものがあると思われる。例えば、「大船 香取海 艦下 何有人 物不念有」(十一・二・四・三・六)の「艦」字は、船のイカリを書くための訓仮名としての機能を持つと同時に、普通の訓仮名で切り捨てられるはずのものイカリ(怒)という意味が、下の「モノオモフ」の内容を暗示するといふ可能性が、稲岡氏によって指摘されている(注4)。「是川 瀬々敷浪 布々 妹心 乗在鴨」(十一・二・四・二・七)と「里透 管浦経 真鏡 床重 不去 夢所見字」(十一・二・五・〇・一)などの場合には、同じ字が、ウチを書いてもカヘ

リミルという語の響きが、歌全体の表現の一つの手法として使用されていると言われている。このような訓字には、字と語との訓の回路は「側隠」や「心哀」の歌より直接的だと思われるが、その歌と同様に、歌の中のある言葉を記すとは別なレベルで、歌の表現を深める文字の働きが見える。または、「丸雪」(七・一・二・九・三)や「小端」(七・一・三・〇・一・二・四・一・一)のような、普通「義訓」と呼ばれている字と語との複雑な回路を持つ用字にも、「側隠」などと同様に、歌全体の表現に働くものも見つけられる。例えば、「人祖 未通女原居 守山辺柳 朝々 通公 不来冥」(十一・二・三・六・〇)を、中絶した求婚の嘆きと読めば、稲岡氏が指摘されるように、フトメの書記の「まだ男の通つて来ない少女」という「原義」は歌全体の意味と深い関係を持つ(「万葉集全注」)。

あるはずだが、「非対応訓」とそうではない訓との関係は明らかではない。稲岡氏の「人麻呂歌集略体歌の非対応訓について」では、非対応訓の肝心なポイントが「漢字とその訓に当たるものとの間に普通の和訓のような緊密な関係が認められ」ないこととされており(65頁)、またはその訓を「歌の表記の試行段階に書かれた珍しい例として扱うのが、もっともふさわしい」と論じられている(72頁)。周知の通り、稲岡説によると、略体歌の書記は天武朝の日常書記に基づいて、その書記が、以上見わたしてきたような用字の工夫などによって、歌を表現するために延長され、補足されたと言われる。その文字表現を精錬する営みが、略体歌(または古体歌)から非略体歌(または新体歌)へ、さらに人麻呂作歌の書記まで発展した、と論じられるのである。

「側隠」などの用字法において、字義と言葉との間に直接的な関係がないことは否定できない。しかし、このようないわゆる非対応訓は例外的に見えても、基本的には、以上を例をあげた略体歌の他の特別な訓字に通じる要素が多いと考えられる。「側隠」のような書記を特化しすぎると、略体歌の書記のこの根本的な意識を見逃す恐れがあると思われる(注5)。
 しかし、本稿で「非対応訓」という概念を考え直して見たいのには、もう一つの、もっと大事な、且つ基本的な理由がある。「非対応訓」の裏には、対応訓、というものが

いわれる途)。しかし、本稿で「非対応訓」という概念を考え直して見たいのには、もう一つの、もっと大事な、且つ基本的な理由がある。「非対応訓」の裏には、対応訓、というものが

な、広い意味の「普通の和訓」との間には、はつきりした隔たりがあると思われる。その二つの「普通の和訓」の相違が曖昧になることが、「非対応訓」という概念の根本的な難点である。

二 特別な訓字から普通の訓字へ

相關歌を多く含む略体歌には、ミル・コフ・フフ・オモ

フの動詞が頻繁に使用されている。その動詞の書記を調べれば、「妹当 遠見者 恠 吾恋 相依無」(十一 2402)と「妹 恋 無 乏 夢 見 吾 疑 念 不 所 察」(十一 2412)に見えるような用字が圧倒的に多い。コヒ

を「恋」で書く、またはフを「相」で書くことは、当然な、平凡な書記のように見えるので、以上に述べたように、そのような用字は「非対応訓」に对照する「普通の和訓」と受け取れる。しかし、略体歌の他の歌には、少数ではあっても、上の四種の動詞と同じように読まれる、他の字もある。「見」「恋」「相」「念」以外の「看」(七一 294)・「管」(十一 2481・2501)・「逢」(十一 2413・2507)・「思」(十一 890、十一 2404・2430・2456・2487・2515)の用例である。これらの特別な訓字は表現的な効果をもつので以上論じられた訓字の性質と共通する点が多い。例えば、「大野 麻状不知 印結 有不得 吾管」(十一 2481)と

で書かれたコフとなる。無論、略体歌では「恋」のほうは地面の書記で、「管」と同じほどの特異性をもたないが、その地面性は「管」の存在に基づいている。このように、以上に見わたした、略体歌における意識化された字と言葉との相互作用が、もつとも普通の書記まで及ぶのである。

三 歌集を書く工夫としての略体歌書記と

木簡などに見える日常的な書記

以上に見てきた略体歌の訓字の用字法は、もちろん歌を書くための工夫であるが、それと同時に、歌集を書くための工夫でもあることが、その働きを可能にする基本的な条件の一つであると考えられる。「管」で書かれたコフの意味の一つの大事な要素は、他の歌のほとんどには「恋」という字がコフを記すために使用されていることであり、逆に、「恋」とコフとの関係を意識させる要因は、少数ではあつても、「恋」ではなくて「管」で書かれているコフをもつ歌テキストの存在である。以上見渡してきた文字と言葉との関係に基づく表現効果は、複数の書かれた歌の間にしか成り立たないものである。これは一つ一つの歌の成立——またはその一つ一つの歌の書記の成立——の問題ではなく、言葉と文字との、そして歌と歌との相互関係において成り立つ書記の問題である。

その複数の歌テキストの存在を表現手法の一つの大事な

「里速 管浦経 真鏡 床重不去 夢所見字」(十一 2501)では、「管」字はコフを書くために使用されている。内田賢徳氏によって指摘されているように、カヘリミル意味をもつ「管」という字によつてコフとコヒを記すことには、歌全体の意味との関係が読み取れる。つまり、2481の場合には、「標ゆつた相手をはるかにかえりみ思うのであろう」と、2501では「相手の住む里から遠く離れた状況である。そこを去つたところから相手を思うのであろう」といわれる(注6)。コフを書く「管」字の別な「かへりみる」という意味が、歌全体との関係において働いている可能性を考えなければならぬ。

以上の用字の表現的效果を可能にする一つの条件は、「管」字などの歌集における使用頻度の相対的な少なさである。例えば、コフの書記として、「恋」字が頻繁に使用されているからこそ、稀な「管」字で、歌全体の意味のある要素を強調することが出来るといえる。しかし、その「恋」と「管」の相互関係は、逆の立場からも考えなければならぬ。仮に、コフという語が「恋」字だけで書かれていれば、その「恋」字は単にコフという言葉を書き方であり、いわゆる「普通の和訓」に当たると思われる。しかし、コフという言葉を書き時、に「管」とも書くことが可能な、そしてその「管」字の使用によつてある表現効果が意識的にもたらされる場合には、「恋」字を使用しても、それはただの「恋」コフではなくて、「管」ではない「恋」

条件とする略体歌の書記を、日常的なコミュニケーションツールである木簡の書記と比較すると、その対照的な性質がわかる。文書木簡などによる伝達の条件を想像すれば、書き手と読み手は、漢字の意味や機能に関する知識と訓読の能力からなる基本的なリテラシーを共有して、それに加えて解や符のような決まった文書の形式を知らなければならなかった。略体歌、それからもと広く、人麻呂歌集の書記の成り立つ条件を考える場合には、以上のような実用的な知識に、歌歌みの能力や漢籍の深い教養を加える必要があるだろう。しかし、その条件だけでは、本稿で見わたしてきた文字の表現の手法は成功しなかったと思われ

る。略体歌のある一首の書記の表現を理解するためには、他の略体歌の書記の表現に触れなければならぬのである。つまり、歌を書く工夫と同時に、歌集を書くための工夫が働いているといえる。「歌集を書く」といえば、物質的な書籍からなつた、文字どおりの歌集や、いわゆる人麻呂歌壇のような場などの存在は想像できるかもしれない。しかし、本稿ではそのような万葉集以前の段階やその中の歌の成立の問題を考えると、現存する万葉集の「人麻呂歌集」に見える、相互関係を持つ多数の歌という「歌集」を捉えたい。

以上、略体歌における「非対応訓」とよばれている用字と他の特別な用字には、共通する字と言葉の相互関係である訓読に対する積極的な表現意識が共通することを見た。

そして、略体歌の中の「普通の和訓」であるはずの訓字に、そのような意識が働いていることを指摘して、多数の対照しあっている歌の間にかその文字表現が成り立たないことを論じた。以上のような訓に対する意識や多数のテキストの訓の相互関係は、木簡の世界とは無縁である。小林芳規氏の「訓漢字」論が明らかにされたように、木簡の世界で流通する訓字は、単なる言葉を記す方法としての性格が濃(い)き。その文脈では、字と言葉は「緊密」といえる関係をもつので、木簡などには、略体歌に見える表現効果を意識的にもたらず訓のパラエリは見当たらないものである。

歌を書くための豊富な表現の可能性を持つ字と言葉の相互作用は、情報伝達のための文書木簡の場合には、邪魔するものに他ならない。この書記の性質の相違は、「非対応訓」と呼ばれるものなどの、目立つ用字の部分的な現象だけではなくて、略体歌書記の全体にかかる問題である。その略体歌の書記を、歌を書くために、天武・持統朝の日常書記が延長され補足された結果と見なせば、その本質を見逃す危険があると思われる。本稿で「非対応訓」の概念を考えなおそうとする中心的な理由は、その概念の使用において、略体歌における用字と、七世紀後半の実用的用字との間の根本的な相違が明らかにされていないことに対する疑問である。

知られるように、近年、飛鳥池や観音寺のような七世紀

る。

- 注1 「人麻呂歌集古体歌の『非対応訓』について」制隱・心哀・無之など「論集上代文学」十七(1989)。
- 2001年の11月号の「國語と国文学」に、「人麻呂における歌の変革」という制隱氏の新しい論文にも、その用語をもって略体歌書記の性質が論じられている。
- 注2 「制隱」の歌は、十一・2393・2472・2473、十二・2857・2863の五首である(いずれも人麻呂歌集略体歌。以下同じ)。
- 注3 小島憲之「上代日本文学与中国文学」中、楠書房(1964)、889頁。
- 注4 「万葉集全注 卷十一」有斐閣(1998)。
- 注5 西條勉の「人麻呂歌集略体歌の固有訓字」書くことの詩学」(西宮一民編「上代語と表記」おちふら「2000」)でも、略体歌書記の広い表現性が指摘されている。しかし、本稿は、西條氏のその表現性に対する書記的な意味付けを問題にする立場から略体歌を見る。
- 注6 「歌の中の漢字表現—訓字と仮名をめぐって」『万葉』百六十一(1997年5月)。
- 注7 「表記の展開と文体の創造」岸俊男編「ことばと文字」、中央公論社(1988)参照。
- 注8 「日本語書史と人麻呂歌集略体歌の『書き様』」『万葉』百七十五(2000年11月)。
- 注9 「天武朝の人麻呂歌集歌—略体/非略体の概念を越え

の遺跡から、木簡における音訓交用の書記や和歌の仮名専用書記の確実な例が新しく発見されたのに基づいて、制隱氏が提示された歌集書記に関する発展段階論は見直されている。たとえば、乾善彦氏は略体歌と非略体歌の書記が同一時にあり得た「書き様」として、積極的に選ばれた可能性を指摘された(注8)。または、影響力のある論文で、西條勉氏は木簡との類似性などを論証しながら非略体歌から略体歌への展開を論じられた(注9)。

しかし、いわゆる「稲岡説」の見直しは、新しく発見された木簡の書記と略体歌の書記の質的な違いを認めないかぎり、以前の略体歌書記を扱う基本的なパラダイムを出なすと思われる。想定されている発展の順番が逆になっても、木簡の例をもって略体歌を同じ次元で論じるかぎり、その二つの文字の世界の異質性がはつきり見えなくなる恐れがある。略体歌—それに非略体歌—の書記に表面的に類似するような木簡の書記があっても、多数の歌群の間にかあらわれない文字と言葉の相互作用を駆使用する略体歌の書記とは直接的に比較できない。和歌木簡の場合にも、たとえ歌集歌と同じ定型を持つ歌が記されていても、そこに使用されている仮名と歌の言葉との関係は、略体歌における文字と歌の言葉との関係とは違う現象である。七世紀の出土文字資料を通じて、略体歌を考えることから、テクノロジーとしての文字の歴史の中に略体歌を位置づけて、その技術的な環境を明らかにすることはできる

て「文学」十・四(1999年・秋)。

付記 本稿は、第五十四回万葉学会全国大会(松波渡大学)

で行った口頭発表に基づいている。発表の際に「批判と指導を下された先生方々にお礼を申し上げます。

—コロンビア大学助教授—

●お知らせ

国立歴史民俗博物館創設二十周年記念展示「古代日本 文字のある風景—金印から正倉院文書まで」が、三月十九日から六月九日まで、千葉県佐倉市内町一七番地の国立歴史民俗博物館(TFL 04314860123)において開催されます(その後各地にも巡回する予定があります)。

この展示は、全国各地の出土文字資料や金石文資料、また文房具など文字の周辺資料を集めるとともに、中国・朝鮮の文字資料を組み合わせて古代日本の文字世界を照らし出すとします。そして現在進められているところある正倉院文書の精巧な複製の公開も、展示の大きな柱となります。全八百巻のうちすでに製作された二百五十巻が一挙に公開されます。いままでにない規模で豊富な文字資料の現物、複製にあられる場となります。またタッチパネルや体験コーナーなど、デジタルに体感することもできます。古代文字世界の全体像に迫る画期的な展示としてご案内します。

界教育界の動向 173

ブックエント 218 183 228

遺選・文学誌 129
文化主義と社会問題
「芸術共和国」——中山義秀、徳永省三郎、真木肇ら
吉田健二郎「妻の丘」
桑本敏寛「文化主義と社会問題」

栗坪 良樹
川本 三郎
大笹 吉雄
紅野 敏郎
谷沢 永一
西田 耕三
青木 周平
171 170 168 164 160 158 156

連載 130

近代小説新考 明治の青春 夏目漱石彼岸過迄(その十一)
もみち葉を吹きながらしそ山おろしの風 古今和歌集評釈 230
貝を覆ふ人のわが前なるをば指きて 徒然草評釈 270

野山 嘉正
久保田 淳
小町谷照彦
151 147 142 230

連載

境界の侵犯から 20 第八街区(続)

和田 忠彦
138

資料の現在——木簡・金石文等
資料の現在——I 丁関係／朝鮮

福田 武史
館野 和巳
130 122

V 資料の現在——情報整理を含む

テクストとしての『集』——書く歌の自立について
人麻呂歌集「略体」書記について——非対称訓論の見直しから テキスト・ルリ——
『古事記』——文字テキストとしての水準
古事記の文章と文体——音訓交用と会話引用形式をめぐって

西條 勉
神野志隆光
乾 善彦
114 107 100 92

IV 文字テキストの、テキストとしての水準を問ひ直す

——古事記／万葉集

文字／表記／表記／テキスト——書くことが成り立たせた古代

古代の人名表記と読み(寛書)

吉村 武彦
84

書くことのパララックス

吳 哲男
78

『古事記』の書記様式と補読

山口佳紀
71

日本書紀訓注の把握

毛利正守
63

表記論の可能性と限界——『万葉集』の場合

佐佐木隆
56

III 表記(書記)の現場から

正倉院文書——ものごとの見極め

杉本一樹
48

墨書土器研究の新視点——文献史学の立場から

三上喜孝
40

長屋王家木簡の「御六世」——表記史と木簡

東野治之
35

金石文——五世紀の刀剣銘、七世紀の造像記・碑文類から

金沢英之
28

II 資料論——いま問題になること

訓読がひろくもの

青木周平
19

古代朝鮮の文字文化と日本

李 成市
13

古代文字のメッセージ——中国古代の虚実

平勢隆郎
6

I 総論——中国・朝鮮・日本を視野に入れて

表紙絵：横田 海

